◎特集1

若手経営者が語る「まちづくり」

ここ数年、議論が活発化している中心市街地活性化。
それは「宇都宮の中心部、大丈夫か?」という危機感のあらわれでもあります。
危機を乗り越えるには、新しい発想や行動力が不可欠――――
そこで今回は、若手経営者3人にご登場いただき、「まちづくり」にかける想いや提言をお話しいただきました。

㈲鈴木板金工業
鈴木 秀範さん（写真左）
×
有限会社 イプスィロン
代表取締役 中田 陽子さん（写真中）
×
株式会社 ギフトセンター三樹
常務取締役 営業本部長
金子 裕司さん（写真右）

前号（5月号）で、官民の組織である中心市街地活性化協議会が発足したとお伝えしました。現在、中心市街地の活性化は待ったなしの課題となっています。けれども、これまでのように「ハコを造ればいい」「イベントをやればいい」という発想だけでは、うまくいかないのは明白です。肝心なのは、「ハコ」「イベント」をどう結びつけ、有機的な相乗効果を生むか、というところでしょう。

そこで本誌は、今回若手経営者3人にご登場いただき、新たな視点での「まちづくり」をご提言いただくことにしました。

3人とも、これまでまちづくりにはそれぞれの立場から関わり、努力をされて来られた方々です。そんな自らの体験と、若い経営感覚で、まちづくりへの提言をお願いしたところ、いずれも興味深いお話をいただくことができました。

㈲鈴木板金工業の鈴木さんは宮まつりの総括責任者を務めた経験から「地域活動を核としたまちづくり」を、㈲イプスィロンの中田さんはご自分の職業と旧栃木県庁舎（昭和館）での結婚式に携わった体験を踏まえて「オシャレができる街」を、そして㈱ギフトセンター三樹の金子さんはおもてなしBOOKなどの経験から「おもてなしで観光振興」を、それぞれご提言くださいました。

一味もふた味も違う今回の提言、どうぞじっくりご賞味ください。

「地域の活動を核に、まちおこしの拡大を」

有限会社 鈴木板金工業　鈴木 秀範さん
［㈳宇都宮青年会議所メンバー］

宇都宮青年会議所のメンバーで、駅東の宇都宮市陽東にて㈲鈴木板金工業を営む鈴木秀範さん。お住まいも駅東という立場から中心部をどう見ておられるのでしょうか。

「最近は、あまり行かなくなりましたねえ」と腕を組みます。「私たちの年代が出かけるといえば、家族連れ。小さい子供もいます。親が買い物をしている時に、子供たちを安心して遊ばせておくような施設がないんですね。だから、常に目を光らせていなくてはならない。これが案外、大変なんですよ」と苦笑します。そういった施設や環境の整った郊外店へ出かけることが多いとのこと。

「もちろん、目的がある時には中心部へ行きます。中心部でなくては買えないものがあれば、出かけます。だから、そういうお店がもっと増えればありがたいですね」

今年34回を迎え、すっかり宇都宮市の夏の名物となった「宮まつり」。青年会議所が中心となって行っているこのイベントに、鈴木さんは3年前、実行本部総括責任者として、実質的なリーダー役を勤めました。

「宮まつりは、私たちのような周辺部に住む者から見ると、何となく『よそのお祭り』というイメージがありました。あれは中心部のイベントだね、という。ですからそれを、宇都宮市民全体が『自分たちのお祭り』と感じていただくにはどうしたらいいかを考えました」

そこで出てきたのが、市内幼稚園生によるパレードでした。

「子供が参加すれば、親も一生懸命になります。親子で地域との一体感を持つことができます。また毎年参加していただくことで、幼稚園を中心に、地域のまとまりができてくると思います」。そんな狙いが見事に当たり、親子や祖父母など子供から大人まで楽しんでもらえる行事となりました。

そんな体験を踏まえ、鈴木さんは「イベントで重要なのは、将来に繋がる運営をすること」と言います。「イベントをただぼんとやっておしまい、ではダメ。縦軸は来年、再来年とつながること、横軸は地域のまとまりや地域同士の連携が生まれること。こういったことが、実はイベントを行う際、最も大切なことではないでしょうか」と体を乗り出します。

「楽しいイベントを体験すれば『来年もまた参加しよう』と感じます。それが継続していけば、そこから地域への愛着が生まれます。またイベントを一緒に準備したり、参加したりすることで、人のつながりが生まれ、これも郷土への愛着になっていきます」。こういった良いサイクルを生み出すことが、まちづくり・まちおこし――鈴木さんは、そう力を込めます。

宮まつりは宇都宮の人気行事

「おもてなしの心を根付かせることが『誇れるまちづくり』の第一歩」

株式会社 ギフトセンター三樹
常務取締役 営業本部長 金子 裕司さん［当所青年部メンバー］

宇都宮商工会議所青年部（YEG）では「おもてなし日本一を目指して！」運動の一環として、「おもてなしBOOK」を活用した〝おもてなし出前講座〟を一般市民に向けて展開しています。この出前講座は小中学校の社会科の学習にも継続して取り入れられ、市民のおもてなし意識の高揚や来街者へのホスピタリティ向上につながる基礎を構築するものとして高い評価を得ています。

「宇都宮餃子・元祖宇味家」の店舗展開をはじめギフト・食品・リサイクルなど宇都宮市を中心に幅広く事業を展開する㈱ギフトセンター三樹の常務取締役で、営業本部長でもある金子さんは、平成18年度にYEGの「おもてなし委員会」委員長として、「おもてなしBOOK」の編集に取り組みました。

宇都宮おもてなしBOOK（150円〈税込〉）

「おもてなし活動は、宇都宮市の将来のためには観光に焦点を合わせた街づくりが必要との思いから、YEGの先輩たちが熱心に取り組んできた活動です。冊子を作る必要性への理解を得ることから始めて、『おもてなしBOOK』の初版までには丸1年の準備期間がかかりました」と、当時の膨大な資料を見せながら振り返る金子さん。自らが企業や校長会などの教育関係の組織に足を運び、「おもてなしの心から宇都宮を変えていこう」と熱い思いを伝えてきました。

「観光を伸ばすために必要なのは、『いらっしゃいませ』と笑顔で言える人づくりです。この街が好きで誇りと情熱を持って『変えていきたい』と思う人が増えれば、訪れた観光客にも街の良さが伝わるはずです」。そう話す金子さん自身、生まれ育った地である宇都宮が大好き。「この街が好きだから、もっと楽しくならないか、もっといい街にならないかと、しょっちゅう街を歩いています。ここに新しい店ができればいいなとか、自分の商売と関係なく考えています」

街おこしのキーワードとして重視しているのは、「人」。そして「元気」。全国的に見て観光資源はそう多くない宇都宮ですが、誰もが「おはよう」と気軽に声を掛け合える人情溢れる下町のような街になるのではと、金子さんは「おもてなし活動」を通した街おこしに期待を寄せています。市内の小中学生を対象とした「おもてなし出前講座」は今年3年目を迎え、受講した子どもたちの成長とともにおもてなしの意識が少しずつ根付いてきているとの実感も得ているそうです。

「講座では子供たちに自己紹介をしてもらいますが、驚いたことに自己紹介ができない子どもは一人もいません。小さな頃から自然に相手を思いやる心や人をもてなす気持ちを身に付けていけば、大人になって積極的に自分が住む街をアピールできるようになると思います。活動をコツコツと継続していくことが大切。仲間がいるふるさとって、いいものです。それを子どもたちに伝えたいですね」

おもてなし出前講座を行う青年部メンバー（宇都宮市立中央小学校）

旧栃木県庁舎（昭和館）で行ったブライダル

「〝オシャレ〟をキーワードに、女性が颯爽と歩ける街に」

有限会社 イプスィロン 代表取締役 中田 陽子さん［当所うつのみや女性起業家ネットワークメンバー］

うつのみや女性起業家ネットワークのメンバーである中田さんは、平成9年にヘアメイクやエステからブライダルまで、女性に「パーソナルビューティー」を提案する㈲イプスィロンを開業しました。

そして4年前に、中心商業地空き店舗出店促進助成金制度を活用して馬場通り2丁目にサロンを構えました。高校生の頃にバンバ通りの飲食店でアルバイトをしたこともある中田さんにとって、この場所は「都会的で賑やかなイメージ」でした。

しかし当初、中田さんは「中心部は〝街の顔〟。商業地としての魅力はありますが、もう少し環境が整ってから出店した方が良いのかな」と、考えたこともあったと言います。

その理由のひとつが、駐車場の確保が難しいこと。お問合せにはコインパーキングを紹介していますが「大通りを運転するのは怖いとか、狭い路地が多く駐車しにくいなどの理由で来店を躊躇する方もいらっしゃいます」とのこと。「他県からのお客さまにはわかりやすい場所ですが、今は郊外の区画整理された地域にも魅力を感じています」

駐車場の問題に加えて、百貨店が閉店し周辺に空き店舗が目立つこともマイナス要因。「サロンではセミナーやスクールも開催しますが、シャッターが下りた空き店舗が並ぶ通りを歩いてくると、気分が暗くなってしまいます。これでは、楽しいことや素敵なことができるというイメージが湧きませんよね」

中田さんが理想とするのは、大人の女性がお洒落をして歩いて絵になる街。例えば東京の表参道のように、オシャレなカフェやレストラン、ブティック、セレクトショップなどのこまごまとしたショップと、緑の街路樹や心地よく休憩できる公園が共存する街なら、その中を颯爽と歩くオシャレな自分の姿がイメージできると言います。

「中心部の活性化に必要なのはどんな街にしたいのか、その方向性を若い人たちに示すことでは。若い経営者が出店しやすいシステムも必要です」と提案する中田さん。「街に素晴らしい場所があっても、あまり知られていないのが残念。人力車を使った結婚式で二荒山神社をアピールするなど、シンボリックなものを街おこしに活かしていく方法があるはず」と、歴史ある建造物を新たな価値観で見直す取り組みも始めています。

今年4月に旧栃木県庁舎（昭和館）で行った結婚式もその一つ。プロジェクトの一員として中田さんはヘアメイクを担当しました。「全国的に話題となったこともあり、問い合わせも多くいただいているようです。結婚式などを機に、若者たちに街の中心部にもっと目を向けてもらいたい。その一つの起爆剤になればいいですね。素敵な街になる可能性は大きいと思います」。また、7月には二荒山神社参拝後の「朝ヨガ」、同会館での「女性スキルアップセミナー」「浴衣でパーティー」などの新たな取り組みを企画しているとのこと。中田さんは今、女性ならではの視点で、この街の将来を真剣に見つめています。